大学生登山リーダー研修会の展望

佐　藤　祐　樹（信州大学学士山岳会）

１．登山環境と学生の変化

私が大学生登山リーダー研修会の講師として働き始めて早いもので８年ほどになる。その間に登山界では大きな変化があった。山ガールから端を発する山ブーム、人気の山に登山者が集中するなどの山のブランド化、山の日制定、SNS（ソーシャルネットワークサービス）で気軽に登山仲間を集める新しい形の登山コミュニティの出現、バックカントリースキーやトレイルランニングなど登山が多様化し、ボルダリングやフリークライミングといった言葉が一般に定着するなどである。また登山人口が増え、レジャーとして定着した一方で、厳しいバリエーションルートなどに登る本格派登山者は減少した。このような登山界の劇的な変化は大学生登山サークルにも大きな影響を及ぼしている。1980年代バブル期以降ずっと人数が少なかったワンダーフォーゲル部や探検部などの部員数が顕著に増えたが、多い部員数に部運営として対応しきれないサークルもでてきた。一方、本格派の山岳部は10人以下の少数運営を強いられ、少人数の期間が長かったことが伝統を途絶えさせ、部活動として崩壊している山岳部も多くなってきた。学生のアンケートでは「部運営の在り方」や「人数獲得の方法」などがよく見受けられる。また、近年のボルダリングブームから山岳部内にフリークライミング班と縦走班に分けて活動をする山岳部が現れたり、顔を合わせて登山計画を練るのではなくSNSで登山を呼びかけるサークルも現れた。社会の変化に応じて学生の登山形態も確実に変化している。

さて、そのような登山界と学生が大きく変化する中で、大学生登山リーダー研修会での学生の様子と講師の指導を振り返り、今後の大学生登山リーダー研修会の展望を考えてみたいと思う。

２．反復練習

近年この研修会で講師の間でたびたび話題になるのは伝達講習のことである。伝達講習とは研修会で学生が学んだことを各々の部に伝達することであるが、彼らの後輩の話を聞くと伝達講習が効果的にされていないことがわかる。登山研修での一週間を報告書として部に提出するだけの学生や、一回の講習のみで終わる学生もいる。残念ながらそのような伝達講習では登山研修所に来た意味はない。伝達講習とは研修に参加した学生が自分と同じことができるようになるまで下級生を訓練させることである。そのためにはひたすらに反復練習を下級生にやらせる。そしてその練習が代々引き継がれて、その部の伝統となり、「型」になっていく。短い大学生活の中で、山岳部の上級生は１年生を冬山に連れて行かなければならない重責をもつ。特に大学山岳部は人を最短で育てる方法を確立していかなければならない。かつての大学山岳部はそれを実行し、伝統として確立していた。それは戦国時代に千利休が提唱したプロフェッショナル育成論「守破離」に似ている。１、２年生で各サークル独自の基本登山技術の「型」を体に憶えこませ、その重要性を理解できなくても型をひたすら「守る」。型を習得した３年生は、型を習得する際に生まれた葛藤を胸に他流儀も研究し、自らの型を「破る」。そして４年生になり自らの新しい

型を作り上げ、山岳部を「離れる」。現在研修所に来ている学生は、この基本的登山技術である型さえも習得していないことが多い。伝統が潰えているので仕方ないのかもしれない。私は登山技術の基礎から、また新人教育システム作りから彼らを指導することが多くなった。すなわち、受け持った班の学生全員が同じことができるようになるまで、ひたすら反復練習をさせ、「型」を体に憶えこませる。同じことを繰り返す反復練習は一見無駄なことだと思われるかもしれない。インターネットを利用すればすぐ答えのわかる時代だが、その答えは小手先の技術である。本当の答え、本当の技術は反復練習をするその先にある。ある講師が言っていた。「答えを教えてもらうのではなく、答えをひねり出す力を養うことが大切だ。餌を与えるのではなく、餌を自分でとるやり方を教える。それが山の中で生きる力となる。」教育の現場では個性を伸ばすことが重要視される時代ではあるが、山では全員が画一的に、皆一様に同じことができないとパーティーとして非常に脆弱だ。一人だけアイゼンを装着することが遅かったり、ロープ操作に不慣れな者がいたりすると隊としての弱点につながる。そこに個人の得意、不得意などはない、上級生の教育や責任意識の問題である。登山パーティーにとって、一人の問題は全員の問題である。まず「型」を体に憶えこませることが新人を教育してくことに関しては最短であり、そのような教育システムを指導していくことが伝達講習を学生が実施するうえで非常に重要であると考えている。

３．結果と連帯責任

比較的新しい、創立２、３年ほどの登山サークルに入部した研修生を受け持ったことがあった。そのサークルではバリエーションルートなどに行っているのにもかかわらず、部会などはなくSNSで「何時〇〇駅集合」といった形で登山が行われていた。一つの登山に対する想いや、人間関係があまりにも希薄であり、チームとしてあまりに弱い。それが部活動と言えるだろうか。私はせっかくの大学生活が勿体ないと感じた。これは極端な例だとしても、この希薄さは大なり小なり学生全体に見られることだ。「楽しい」「楽」「快適」「スマート」が優先されて、部活動に必要な「必死で汗をかくこと」「全力を出すこと」「泥臭さ」などの経験が少ない。部活動には目的と結果がある。登山サークルで言う結果とは山頂に登れたか、登れなかったかだ。登れなかったという結果であったら、なぜ登れなかったのか結果にこだわり、真剣に原因を考える。確かに登山での結果は天候や積雪状況など外的要因に左右されやすい。しかし登れなかった原因を外的要因のせいにするのではなく、チームの内的要因のせいにしないと次の山行に経験を活かせない。良いチームとは目的を達成できるチームであり、山頂に立ち皆無事に下山する結果を出すチームだ。隊の雰囲気が良く、仲良しこよしの「ああ登頂できなかったけど楽しい登山だったね」で終わるチームのことでは決してない。全員が一つの物事に対し本気で達成しようとしたら、必ず衝突が起こる。隊の雰囲気は重要ではない。仲がいいなんてことは、良いチームではあり得ないと思っている。一人の問題は全員の問題であり、連帯責任である。私は研修生に反復練習をさせる時に、決められた時間内に全員ができるようになるまで反復練習をさせるようにしている。連帯責任を身をもって経験させることが大切だと考えているからだ。しかし一人がどうしてもできないと、できない研修生に対して怒ったり、不満を漏らす研修生が出てくる。そして、研修生同士が衝突し、試行錯誤して全員が同じ技術を習得する。

そのような結果と連帯責任を重要視した部活動を

通じてこそ、ＳＮＳなどで繋がった希薄な人間関係などではなく、血の通った人間関係が構築できるのではないのだろうか。

４．規律と統率

私が所属していた信州大学山岳会の部員数は2009年には１人という危機的状況であったが、2010年のOBの献身的な介入により伝統を復活させ、現在は20人近くの大所帯となった。しかし、人数が多くなるに従い、規律・統率が取れなくなってきている。近年信州大学山岳会の事故までには至らないがヒヤリハット事例が多くなってきていることは、規律・統率が緩んできていることが原因の根底にある。昭和29年入部のOBの言葉に「新入部員温存主義がここに至って部活動の障害になっている。」と述べている。いつの時代も悩むことは一緒であり、歴史は繰り返す。会員1名という状況から復活したばかりの信州大学山岳会の中に、新入部員温存主義による規律の緩みがあるように思われる。「規律」=「集団がうまく回るための決め事、皆が守る決め事」を厳しく指導し、統率をとる必要がある。明治大学山岳部では「食器が汚れると遭難する」（登山研修vol.13）と言われているようだ。これは規律・統率の乱れは事故の元だという格言である。ワンダーフォーゲル部や探検部の部員が非常に増えてきているが、人数が多いゆえに規律・統率がとれない部が多い。一方、山岳部は人数が少なく、新人温存主義が多いせいか規律・統率がとれていないところが多い。また、個性が大切にされている時代の影響なのか、下級生に厳しく接することができる学生が少ないように思う。下級生のいかなる事故においても、それはリーダーの責任である。それを重く認識しているリーダーは下級生に対して優しくなれるはずがない。山中でリーダーは下級生の時間を管理し、体力を推し量り、体調までも事細かに把握しておかなければならない。登山研修所では規律・統率の重要性に関しても特に今の学生の状況だからこそ、学生によく伝えていかなければならないと思う。

５．畏怖と本能

前回の夏の大学生登山リーダー研修会では登山計画段階で研修生に「登山のリスクマネジメント表」を作成させた。研修生はよく山のリスクを理解していると感心したが、いざ山に入るとリスクを回避する行動ができていなかった。頭ではリスクを理解しているが、恐怖とは感じていないようだった。すぐ隣に安定した道があるのにわざわざ雪渓が溶けたばかりの不安定な道を選んだり、浮石に対する注意力が散漫であった。山に対する恐怖を感じていない登山者は剱岳のような危険な山域に入ってはならない。SNSの影響なのだろうか、あまりにも簡単に危険な山域に足を踏み入れている研修生が多いように思う。剱岳は明治時代まで地獄の針の山であり、危険の多い畏怖すべき山だ。自分たちの経験・実力をよく自問自答して、切磋琢磨し山に行く姿勢が大切である。山で生きる動物のほうが山の危険に敏感だ。山での危険を身をもって体験している。だからこそその行動は慎重であり、ときに非常に大胆だ。対して、人はどうか。山の技術本が10年前と比べると格段に多くなった。しかし、理性や技術ばかりもてはやされ、大切な生きる本能をおざなりにしていないか。「生物としての人間は自然の中で育つ。」（登山研修vol.26）技術はもちろん大切だが、山への畏怖の念と生物としての本能を忘れずに山に挑むことが今の時代、大切だと思う。

６．大学生登山リーダー研修会の展望

「系統だって登山者を育てることができるのは社

会人山岳部や大学山岳部であろうか（登山研修vol.２）」と言われた時代があった。しかし、現在は違う。どちらも登山者を育てることができなくなってきている。

登山研修vol.12で故柳澤昭夫氏はこう述べている。「登山が世界にくみして、創造的であるためには、そのベースが豊かでなければならない。大きな『うつわ』の中に人や機能、理論、知識、経験等が多様で豊富に蓄積されなければならない。……。大きな組織が実践集団として持つ意味は薄れ、多様で主体的な登山を実践するのは、小さなチームかも知れないが、登山が創造的であるためには、小さなチームのためにも『うつわ』の大きなベースが必要ではないだろうか」。近年の山ブームにより高校山岳部は増加傾向にあると言う（登山研修vol.30）、また大学登山サークルの部員数も一部で増加してきている実感がある。大学登山サークルの『うつわ』としての機能が、日本の登山文化にとってより重要性を増してきている。登山研修所は学生に大きな影響力を持っている。講師は反復練習や新人教育、連帯責任、規律、統率、畏怖や本能といった山で生き抜く力と山への姿勢、「うつわ」の大きなベースの作り方を自ら身をもって一度学生に体験させる必要がある。

これらのことは講師が昔から指導してきたことだ。改革や変化とよく言われているが、大切なことは変えられないし、変わってはいけない。社会の変化が目まぐるしい世の中であるが、その中で本質を守り、むしろ変わらない選択をすることが大切なのではないか。変わることより変わらないことのほうが、現代ではおそらく多くの労力を必要とし、エネルギーが必要であろう。正念場である。

参考文献

登山研修vol.２、P86、1987、山中保一、文部省登山研修所

登山研修vol.12、まえがき、1997、柳沢昭夫、文部省登山研修所

登山研修vol.13、P244、1998、山本宗彦、文部省登山研修所

登山研修vol.26、P32、2011、松島　宏、文部省登山研修所

登山研修vol.30、P18、2015、大西浩他、文部省登山研修所